大学出版

'95 秋

No. 27

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses

大学出版部協会

大学出版
27号

Fall · 1995

読書の周辺　夏目漱石の人種意識 ——佐々木英昭　1
——蔵書書き入れに見る

読書の周辺　一編集人の黙示録（アポカリプス） ——八木　俊樹　6
——E・M・シオラン頌

学術書の原点　ニコラウス・クザーヌスと現代 ——渡邉　守道　11

体験的助成出版論 ——竹中　英俊　16

歩く・見る・聞く—知のネットワーク　2 ——18

大学出版部ニュース ——20

新刊案内'95・7〜'95・9 ——28

製作の現場から 12 ——表3

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

■読書の周辺

夏目漱石の人種意識

――蔵書書き入れに見る

佐々木　英昭

「コンナコトガアルカ馬鹿ヲ云ヘ」

と夏目漱石が書きつけたのは、フランスの人類学者シャルル・ルトゥールノーの大著『結婚と家族の進化』英語版（ハヴロック・エリス編集「現代科学叢書」の一冊として一九〇四年刊。原著、英訳者への言及は同書に見られない）の、第十章第二節「売春」のなかの次のような行文の横の余白にである。

日本では父権が依然として過剰であり、すでに嫁いだ娘にさえそれは及んでいる。たとえば数年前日本を旅していたブースケ氏は、ある若い夫婦の家に一泊したとき、妻の父が彼女を氏に提供し［offered her to him］、夫はそれに抗議することなど夢にも思わなかった、と語っている。（拙訳。［　］内は傍線部に相当する原文。漱石の書き入れ文は『漱石全集』所収。書き入れ位置は東北大学付属図書館夏目漱石文庫での調査による。以下同様）

同ページの脚注が出典として示しているジョルジュ・ブースケ著『今日の日本』（一八七七）は、一九七二年から四年間、法律参事官として日本に滞在したという著者による浩瀚な二巻本である。そこにはたしかに、宿泊した家の若妻の父に好意を持たれ、ある申し出を受けた、という著者の体験談が記されており、その出来事はこう描写されている。

定職に就くにはもう年を取り過ぎているこの好人物は、ほとんどあらゆる仕事をしていたが、平常より少し酒に酔ったある日私に耳打ちした意味明瞭ないくつかの申し出［quelque propositions non equivoques］から判断すると、その仕事には最もいかがわしいものも含まれていた。父の勧めが執拗なのを見た娘が、外国人を苦しめるなとごく穏やかに諌めた。この非難が囁かれるや否や、父は姿勢をただし、残酷なまでの言

葉で娘を叱咤し始めた。娘は無言で頭を垂れ、ひどく狼狽した婿も、沈黙によって義父の立腹に道理を認めているように見えた。

この「意味明瞭ないくつかの申し出」を「わが娘の提供」と取ることによって、ルトゥールノーの文脈は成立している。しかしながら、フランス語のネイティヴ・スピーカーの同意も得たことだが、ブースケ文の「申し出」は、第一、複数でもあるし、そのような読みを許容しえない。つまり「いかがわしい仕事」に携わる老父が単に売春の斡旋（売春にも種別があるから複数なのだろう）をしようとし、娘はそのしつこさを諫止しようとして怒りを買ったというだけの話であり、ルトゥールノーの解釈は、自著の文脈に押し込めて話を面白くするための、まったくの曲解としか考えようがない。

だから漱石とて、この話をもしブースケの原文で読んでいたら（彼はフランス語も読めた）、「コンナマガアルカ」と言下に一蹴しはしなかったろう。出来事の背景をそぎ落として話を抽象化し、自説に都合のよい物語へと変形・通俗化したルトゥールノーの姿勢こそが問われるべきであり、漱石の「馬鹿ヲ云ヘ」も、このいい加減な、いわば〝文脈の暴力〟へと向けられている。これでは西洋の一般読者は、あたかもこれが日本の常識であるかに受け取ってしまうではないか……。

ルトゥールノーの本はこの話に続けて、日本では娘は父から夫へと合法的に売られる所有物であって、貧苦の親を助けて「献身から売春する若い女はむしろ賛美される」というようなことを、まことしやかな事例とともに一ページほど述べ、日本の婦徳観は西洋のそれと大いに異なって「女が自分の気持ちのままに男を愛することはまったく許されない」との断定に及んでいる。その数行後、「日本の道徳が要求するのは、女の貞節ではなく服従である」とした文には漱石の下線があり、その横にもう一度「馬鹿ヲ云ヘ」との書きつけが見られる。そして続く一頁をやはり売春に寛容な伝統を持つインド社会への言及に費やした著者は、「ヨーロッパの売春について語ることは意図的に控えて、私はここで止める」とこの節をそそくさと閉じようとする。ここにも漱石は書きつけた。――「何故貴様ノ国ノ事ヲカヽナイ」。

結婚と家族の「進化」を全人類にわたって記述しようとしたこの書物が、「売春」の節で世界各地の事情を素描し、とりわけ日本とインドを売春の楽園であるかに描いたあとでヨーロッパの状況には蓋をしてしまう、という不公正を漱石は看過しがたかった。売春に携わる女性が人口の六％に及んでいたという一八七三年のウィーン（ロート美恵『「生」と「死」のウィーン』講談社、一九九一。一二一頁）とそう遠からぬ状況にあったはずの、一九〇〇―二年のロンドンに寝起きした経験を持つ漱石であれば、なおの

ことである。

さて、漱石のいわゆる「自己本位」の思想がこのロンドン生活の産物であったことはよく知られている。かなりの拡大解釈が可能で、漱石自身もそれを必ずしも厭わなかったように見えるこのスローガンだが、それは本来的には、まったく異なる文化に属する日本人が英文学を研究することはそもそも可能か、可能ならどのような方法がありうるか、という彼自身の根底的な問いに、自らがついに与えた解答であった。すなわち、ある作品を西洋人が褒めても「私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではない」、「私が独立した一個の日本人であつて、決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具へてゐなければならない」（「私の個人主義」。傍点は引用者による。以下同様）という、いってみれば文化的な独立宣言である。これを一大転機として、爾来、漱石の英文学研究は文学よりむしろ科学的諸分野の読書を中心とするものとなり、この科学的志向は帰国後も、また職業作家となって後もなお旺盛に持続した。右に見たルトゥールノーの書もその一冊にほかならない。

さて、「英国人の奴婢でない」という言い方に見られる通り、漱石的「自己本位」には日本「国民」としてのナショナリズムが一構成要素として組み込まれており、ルトゥールノーへの反発にこもっているように見える激しい感情も、そこに関わっているのであることは見やすい。「自己本位」的転換後のものと見られる蔵書へのおびただしい書き入れや、『文学論ノート』として纏められている探究の記録をつぶさに見てゆくと、人種や民族の問題に関して漱石の反応が特に敏感であったことが知られる。

たとえば一八九四年イギリスの爆発的ベストセラーで、「スペンサーの社会進化論にかわって、一般の人々に社会の進化を説くのに決定的な役割を果たした」（富山太佳夫『ダーウィンの世紀末』、青土社、一九九五。二一八頁）と見られるベンジャミン・キッド著『社会の進化』にも漱石の精読の跡が残されているが、特に尖鋭な反応の見られるのが、第二章「人間の進歩の諸条件」の後半、すなわち「優等人種」（superior race）が繁栄し「劣等人種」（inferior race）は絶滅に向かうという「自然淘汰」の摂理を、優生学の提唱者フランシス・ゴルトンなどを援用しながら講釈したのに続けて、奴隷解放後のアメリカ黒人が解放前と変わらぬ不幸な状態にとどまっていることを言い立てた部分である。つまりは「劣等者の従属、さもなくば絶滅」という必然が、今日も世界各地とりわけ「われわれのかくも誇りとする活気あるアングロ－サクソン文明の圏内」で生起しつつあるのだ、という結論に導くべく、ウィリアム・レアード・クラウズ（『英国海軍』全七巻などで知られたイギリスの著述家）著『黒いアメリカ――元奴隷とその前主人の研究』（一八九一）からの引用を綴り合わせたその論述に対し、漱石は二度の否定的な書き入れを行うのであ

る。

「南部全土に亘って、ニグロの血を受けたものの社会的地位は、誕生の時点で変更不能に固定されて」おり、その「目に見える出自のしるし」が「彼を永久に社会の階梯の最下段にとどま」らせる、白人なら無知、邪悪、貧困でも、扉は開かれており、「黒人は、彼の個人的長所がどうであれ、無慈悲に締め出されている」云々と叙述した部分の横に漱石はまずこう書く。――「是ハ゛たヲ軽蔑スルト同様 natural selection ニアラズ racial prejudice ナリ」。

さらに次頁の下段、「九九パーセントの南部白人の政治信条の基本原理は、あらゆる犠牲と危険をひきかえにしても白人が統治しなければならない、ということであ」り、「この原理に比較すれば、他のどんな政治的信念も滑稽なほど取るに足ら」ず、何よりもそれを信奉するのでない白人は、裏切り者として見捨てられる、「人種問題は、南部では、唯一の重大関心事なのである」、とした一節に対してはこう。――「何ゾ横暴ノ甚しき　之ヲ自然ノ結果ト云フハ愚論ナリ」。

「優等人種」たる白人、それもとりわけ世界に冠たる「アングローサクソン文明」の高みから他のあらゆる人種を、えせ科学的根拠によって「劣等」視しようとするキッドのスタンスは露骨である。ページをめくれば、「アメリカ黒人」はいつ「日本黄色人」に置き換えられないとも限らない。著者はそもそも読者として非＝白人を想定していないのだろうが、「自己本位」的転回によって非＝白人意識をさらに確固としたものにしたはずの〝疎外された〟読者漱石が、冷ややかにその人種差別主義を相対化しながらこの書を読み継いでいったであろうことは、他の多くの書き入れからも察知されるところである。

たとえばキッドは第九章「人間の進化は初期には理知的なものでない」に至って、ご多分に漏れず古代ギリシア文明の「優等」ぶりを言い出し、「知的活動の主要部分における諸傑作がいまだに乗り越えられておらず」、「それら傑作の創造者の数から見て人口が大変少ない」ことを理由に挙げて「歴史上最も有能な人種は古代ギリシア人だ」としたゴルトンの説を引く。その横の余白に漱石の書き入れはある。――「此位ナ議論デハ証拠ニナランデハアリマセンカ」。ついでながら、その数行下でゴルトンは、「アテネ人種の平均的能力は、最低に見積もっても、われわれより二度［two grades］ほど、すなわちわが人種がアフリカのニグロより高いのとほぼ同じ分だけ高いのである」とまで説き及んでいる。

ここからナチズムまではあと一歩であり、書き入れによって示された漱石の抵抗に、そのような歴史の流れへの、それと意識されざる抗いを読んでもよい。漱石のこの闘いは、キッドの第二作『西洋文明の原理』（一九〇二）への反応において明白さを増している。「カヽル説明ハ詳細ナル論証ヲ要ス」、「何故？」、「君ハヨク此字ヲ使用スルガ

何故カヲ説明セヌ」といった書き入れによる漱石の一連の不同意を貫流しているのは、「未来は、現在より重要であり、未来へ向けて人間の倫理性と社会的効率が「進化」してゆくという、この書全体が依拠する仮定への懐疑である。実際、キッドのいう「社会的効率」が軍隊をモデルにした概念であることもやがて明らかにされ、ほとんどナチズムの予告を読むかの行文になってきたところに、「余ノ疑ヒシハコヽニアリ、余ノ未来ヲ何故ニ重要ト言フカヲ怪シ［ミ］シモコヽニアリ」との漱石の書き入れは残されている。

白人のすぐれた軍事的「効率」が、停滞せる他人種を圧服する「必然」。この「必然」を持ち上げ、〝証明する〟様々の通俗的な「物語」。そこに潜む暴力を見逃さないところに、「自己本位」の学者漱石の真骨頂があったといってよい。

ところで、それでは漱石が人種にかかわる西洋人の議論の一切をヒステリックに否定したのかといえば、決してそうではない。たとえばジャン＝マリ・ギュイヨー『社会学的観点から見た芸術』（一八八七）のフランス語原著（一九〇九年版）には「然リ　テインの不充分ナル所」という賛同の表明が書き込まれているのだが、それは、「天才」を論じた第二章の第二節「新しい社会環境の創出としての天才」のなかで、イポリット・テーヌの社会学理論を援用しつつもその不十分さを指摘した部分、テーヌの強調する「環境の影響」が「たいていの場合、決定不能である」ことを論証した段落の横に残されている。

第一に、とギュイヨーはそこで論じている。「人種の影響」をいうなら「いかなる人種も純粋ではない」ことが「人類学によって証明されて」（脚注にスペンサーの『記述社会学』が引かれている）いるし、しかも「混血人種の知的・肉体的性質が科学的に認知されることはない」。また同一国民でも顕著な地方差があり、しかも「一地方に特有な精神なるものが常に認識されるわけではない」のだから、結局「人種の特質がどの点までどの程度に個人に存続するかは決定しえないのだ」と。

特定民族の優秀性を言い立てようとする人種差別主義者の議論が見て見ぬふりをした実相をいみじくも暴いたギュイヨーは、「物語」への警戒を怠らない点で漱石の賞讃に値した。さて、その漱石が、アジアに向かうとき、はたしていかなる人種差別主義的「物語」にも搦め捕られなかったかというきわめて興味深い主題を論じる余裕はもはや残されていない。願わくは、来春刊行予定の拙編『異文化への視線――近代文学の〈外部〉を読む』（仮題、名古屋大学出版会刊）を参照されんことを。

（名古屋工業大学助教授）

■読書の周辺

一編集人の黙示録（アポカリプス）

――E・M・シオラン頌

八木　俊樹

＊

世紀末というものが殊更に意識されはじめたのは何時の頃からであろうか。更に、世紀末というものを終末そのものと誤解したがるのは、人々の習癖なのであろうか。かかる習癖の形をとった黙示と審判への願望が亦、諸々の事件（ドラマ）を世紀末の酒宴に誘引するのであろうか。――いやいや、事態の真相（レアリテ）を辿るなら、事の次第は逆であろう。先づは記憶と予兆を喚起する一連の事件があり、各々の文化はその固有の核（イデー）に殉ずべく、彼の歴史の文体或は輪廻を、時として励起し整調し鼓舞する必要がある事から、そうした事件を終末論に迄、必死に脚色して来たに違いないのであって、世紀末という暦の上の印に形骸化した終末を扮技してみせるのは、自らの固有時を失った文明人の憂鬱症（ムランコリー）に過ぎぬと言わねばならない。今や世紀末は、慣習と處世の手垢に塗れた除日の夜の梵鐘ほどにも悔恨と回心の契機になりえやしないのであるが、二十世紀の暮方、人々は十進法の数術に身を委ねて、頻に世紀末を語りたがっている。

この白昼の世紀末、高々躁鬱症的な小心と臆病な抑揚法でしか痙攣しない世紀末、世紀末の象徴というより現代の黙示録（アポカリプス）そのものであったE・M・シオランの死を歯牙にもかけぬ世紀末に、然し、終末論を口説するどんな権利があるというのか、凡（すべ）ての事象から賭と戦闘と詩と悲劇性が喪われ、誤読と事故と散文と劇（ドラマ）なき喜劇が進行し、あらゆる事象が、極端に言えば、遊戯（ゲーム）と化した現代の現代性に於て、人々は遊戯（ゲーム）の過熱膨張（バブル）もしくはその縮退陥没を終末と見做す愚を犯している。その心理と生理を計量すれば、其處には、現代という無何有郷（ユートピア）の自己催眠による保守願望と、安眠を脅迫するものへの被害者的嫌悪と、遊戯（ゲーム）の安全性と透明性への細（ささ）やかな改良主義しかありやしないというのに、である。――だが、終末というものの動かせぬ与件は、各人や社会の死と奇蹟による再生の文体、その上に編まれる憤怒と諦念、復讐と自己失墜の過激な妄想（ファンタスム）に他ならぬのであって、無邪気な不安の美学ではなかろうはずだ。だから、若し世紀末や終末を語るというのなら、現代

という黄金時代の、白昼の遊戯の不可視の核に於て、そのどの様な錯誤と原理とが臨終を迎えつつあるのかを診断し予言し、最後の審判に加担すべく計略を挙げて煽動し蜂起を準備しなければならぬ、という事になるに違いなかろう。

省みて書物に携わるとは、神や使徒や悪の、或は宇宙や爬虫類や隠花植物の、福音や黙示、創世や進化の自己生成や因果や呼吸を伝達すべく、無数の聖書と博物誌を編む事以外の何ものでもあるまい。してみると、神の直接の啓示から遁走した歴史に於ても、学や科学の下役としての編集人は、常に時代の終末を世に送る義務と権利を持つ、と覚悟する必要があろうというものである。而も、神の最も忠実な下僕が神を憎悪したように、学と科学を呪詛し軍略を以て裏切りつつである。

＊

思想の公準としての社会主義が擬制であるかどうかは別として、露西亜社会主義が擬制であった事は疑いない事実として一般の承認を得ているが、とすると、社会主義というものの浸透圧を受けそれを吸収さえした所謂自由主義圏も、体制としては単に純系でないばかりか擬制的なものであった事は、自明であると言って差支えなかろう。二十世紀が体制問題を基軸としてその劇を展開したと仮定するなら、各々の貸借対照表には同一の項目が列記されているに違いないからである。寧ろ、社会主義が如何に奇怪で倒錯的であったとしても、歴史というものの文体を一新せんとする狂信と熱情に伴う恐怖に、逆むきに剝かれる事もなく、終始防衛的に自由の美名を口説してきた自由主義の方が遥かに愚劣ではないのか。言う迄もなく吾々にとっての最大の罪と罰は、歴史の未だ空白に、新文体の無を造形する事のない黙示的科学主義の教義に、亦打倒すべき対象の核に迫る事のない武器の競争と均衡の形式の下で、影響力の拡張と間諜網の編成に遭進するために、凡てを供儀と化した共産主義の組織と運動にある事は断定し自嘲して置かねばなるまいが。二十世紀は、斯くて、擬物の、擬制の世紀であった。擬制は二つの体制の対立と浸透として競われたが、その最終的な止揚形態が、世紀末のこの眼前の風景としてあると言ってよい。――だが然し、この無念の想いと白昼夢の喜劇とが空虚な明度さで液状している風景をどの様に理解すればよいのか、一通の臨床報告も実験的執刀も試みられてはいない。成る程、弁証法の否定の否定の定式を用いて、アダム・スミスの「諸国民の富」という古典が孕む両義性の理想郷の、理想郷への社会主義の道と資本主義の道との絶妙な対位法を、気位いばかり高い教義と教理とが折れ合う事なく傲慢と威勢を競った挙句、奇妙に醜悪に統一された多調を奏するに至った、と、言葉を換えるなら擬制の理想郷に辿り着いたのであると、概括してみせる事は出来ようが、擬制の擬制性の根拠に迫れたものは誰もいやしない。一体これは何故であろうか。

歴史とは神の絶対の孤独が発する悪意の展開に過ぎず、

永遠の黙示録である。人間とは神の開かれた傷口、生誕とともに災厄を抱え込んだ神の形而下的単子である。そういう次第なら、専制と隷従、圧政と貧困は殆ど普遍の真理に他ならぬ歴史の常数であり、かかる歴史の本能を支え忍苦し、それどころか自らこの渾沌と間断のない絶望的な錯誤とに合体するためにのみ、普遍的な無――意味の上に灌がれる微笑たる救済の約束と楽園――だが不可能性の、人間の時間を拒否した、天上の楽園が必要なのであって、地上の楽園、衛生無害の理想郷なぞ、高々歴史の水準に於る創世紀の夢、衰弱した文明人の臆病な妄想、怯懦と倦怠の上に打ち立てられた消費の涅槃ではないか、と、蛮族の末裔、妄執の狼狂シオランは、痛切極まりない巴爾幹の破調を唾棄して止まなかった。だが然し、だが、神を懐妊し、それ故悪を宿命づけられ、神の観念を極限迄辿り、神の経験の凡ての可能性を開陳すべく運命づけられた露西亜が、病的な生命力と征服事業、韜晦と狡智、判読不能の凄絶を歴廻り、共産主義という天上のものとも地上のものともつかぬ二重に擬装された楽園の矛盾の旋律を掻き鳴し、意識と無意識の底の底迄攪拌しつつ、最後の大帝国の生成を謀った露西亜が、自由の微病原体に犯され寛容と思慮に侵蝕され、衰弱と風解を歩んでいるのは一体どうしたと言うのだ。将又、精神的乱脈の性癖と売春婦の生の嫌悪、栄光と没落意志、亜欧州の未開人ゆえ不眠症の裡にあらゆる下劣な聖徳と敬虔な瀆聖との遺伝質を蓄え込まされた巴爾幹迄も自由に感染し同伴するとは、神も亦、自ら消耗しはてたのか。歴史は宗教的天分を失い最早、ただの屑しか遺贈しえないと言うのか、それにしても来たるべき圧制と帝国は一体どの民族の、どの国家の痙攣から生まれるのか。――臨終の椅子に凭れて、破滅的な肯定に飢えた狂熱的な否定者たるかのシオランが、こんな風に、疲弊した神と歴史の自由という欠落への陥没を幻視したとすると、この逆説は余りも残忍だ。――吾々の表皮と大気は楽園の頽癈と脱構築という名の玩具と遊戯との対流に浸潤され、地上の憤怒と見神は、この対流に吸収され呼吸され、決して天上の神に辿り着く事はない。凡ての事象から血と力の作法を抜き去り、あらゆる心的・物的事象からその固有な内容を簒奪し、徒に陳腐を増幅させるこの楽園は、空白の核と空虚な軸による運動と回転であるがために、凡てを無化しつつ永遠を僭称しうるというものだ。それどころではない。この薄明の緩衝液は私の自我の明暗法を揺り動かし引き裂く。倦怠も無意志症も、無為も断念も、嘗ては穴居人たる私の自我の深淵への跳躍、狂気への逆しまの禁欲であったに違いないのに、おお今やそれは、私と、私自身に反する思考たる私の間に居据る薔薇色の帷であり、私という根源的自我を最後の避難所とした神と私との距離であり、神の屍衣、神の残體だというのだ。熟若にせよ私と私の魂、私の魂とその内奥、私の内部圧と外部圧の果てしない不均衡が拡がり、内圧を失ったそ

れらが、くっきりとした殴り合いもなく弛緩し遊泳しているのだ。吾々は、だとするなら、吾々の最深部を宰領し保証してきた、かの天上にして魂の内奥の楽園を喪失したのであろうか。それとも、吾々の無気力と怠惰がそれを漏泄し白色の祭壇に供儀したのであろうか。

＊

ある意味で、確かにパンドラの函は再び開けられた。希望が飛び出したわけではない。歴史と人間に対して封印されていればこそ、それは希望であるのだ。楽園の二重の追放者たる人間とその歴史は、封印されているが故に際限のない愛惜と憎悪を抱きその幻の呼吸の必然的な帰結として、熱狂と悲嘆を、悪夢と幻覚を疾風の如く駆け廻ったし、常軌を逸した殉教と悪徳を、形而下の性欲と聖性への涙とを遍歴した。人々のみかけばかりの敬虔も恥らいの小さな喜びでさえも、郷愁の遠源として、この封印を絶対の必要条件としたのである。そして、存在、即ちこの封印されたものの開示を禁欲しつつ、その幻の、激情と抒情の、旋律と律動の表現に変位と位相差を認められるにしろ、人々の生が平凡であれ奇怪であれ、平たく言えば日常性、生活というものが、この封印された幻想に生きる、十分条件であり培養基であるに違いない。

そういう次第であってみれば、現代の世紀末とは、日常性一般と生活一般の喪失として定義してよい。

差しあたり封印が解かれ楽園の影陰が微笑したと、現代ゲージ理論がその量子効果を祝福の裡に確認し情報産業が殺到した。だが考えてもみよ、神の劫初の身慄が楽園であるからには、神と自我との下意識の痙攣が楽園であるからには、封印されていればこそ本物の楽園だったに過ぎず、封印の解除は、本物の神の、想像を絶する原初的にして超越的な錯乱を解放する事ではないのか、さてこそ吾々は、シオランに倣って世紀末の黙示録を傲然と言い放つ事ができるのではないのか。地上の緩衝地帯に私の血液網と神経組織が崩壊させられ吸収されたとしても、私の自我の底の底に明晰に残存する一片の肉と一滴の血の鼓動が、向かう側に拡がる超帝国の内臓に逆流し挑戦する時が来る、と、今は、この緩慢な死の感覚を這い廻り、この緩衝地帯の秘密を仮借なく暴露すべき時だ、と。

＊

情況論的に叙れば、共産主義という布告され、強制された幻想が逆説的に天上の楽園を射呈に収めており、それに勝利したからには、世界に対して楽園を予約してもよいという躁状態の自由主義が黄金時代の信仰を完成した。無論、凡ては軽度の精神錯乱を病んでおり、自分自身に欝の不安はあるものの、それは治癒と丸ごとの包摂と排除で解決しうるという自信も亦、躁的な信仰のものである。

この新たな黄金時代の信仰を演出したものは何か。労働と知、商品と科学、擬制資本と情報の、謂わば快楽の三段論法がそれである。理想郷の古典の理念を支える原理が

（商品）労働と科学であると指摘したところで、然したる異論はあるまい。創世記に於る原初の楽園（ユートピア）からの追放が労働と知とを結果として受け取ったとするなら、科せられた罰を逆用して原罪を償い楽園の復活を願うという、その構想の卓抜さと工夫された弁証論理は称讃されてしかるべきであろう。その上、労働と知を商品と科学に転換させる事によって、楽園（ユートピア）への軌道（レール）を商品形態と科学の進歩として定式化したのであるから、尚更の事である。だから、空想的楽園主義者（ユートピスト）が、商品と労働との三位一体神を資本家（ブルジョア）より信頼したとしても驚くにあたらない。労働とか知とかいうものを社会が社会に対して行う手続きだと広く仮定すれば、商品と労働と科学とは夫々社会の信頼を得ていたばかりか、各々の内実を交換し吸収する事によっても亦、確固たる存在の社会性を誇っていた事は、この時代の一般の事実として疑い様がないからである。だが、商品と科学は労働を吸収するとともに、それを離反する。商品とその転態たる資本が、資本による科学の動員が、労働の離反に如何に忙殺されたかについては、資本論の叙述を借りる迄もあるまい。では今日、商品は質に於て単なる機能や遊（ゲーム）を担う底意しれない無感覚物に過ぎず、価格はあるが一片の価値も労働も内包しているようには見えず、空虚それ自体と化しているのをどのように解釈すればよいのか。――無論、価値と価格の乖離から始まって経済学的に厳密に説明されなければならないが、端折って脈絡をつければ、G―Gという資本の無概念的運動を擬制資本が体制として完成する事によって、資本の価値増殖の手段であった商品は、手段の累乗化された挙句の無概念的な、擬制的記号の、矮小な事物に転落する以外にはない。ここから、商品の内実としての労働も科学も商品体から剝離し、労働と価値とは商品の生産と流通に伴うストレスと疲労物質として中空に浮遊し、科学は亦、商品の表面的機能や情報として断片化され放散している知と労働の最もみじめな利用形態に過ぎない、という事になる。斯くて、労働と科学は、商品の空虚な核（イデー）であり、それ故、擬制資本空間（情報空間）に放散された媒体粒子（メディアル）として遊泳しているに過ぎない。これこそ、人々の彼岸であった共有の、普遍性の楽園（ユートピア）の、擬制資本の支配下での逆説的成就でなくて何であろう。

商品世界は、吾々の労働と知と価値観の様々な分裂を貨幣という公準で整序したところに成立する。科学も亦、吾々の社会と自然に対する多様な対話（分裂）を、現在的社会が公認する普遍性という名の公準、言わば精神の貨幣で整序したものである。この貨幣公準を止揚するためには、商品世界や科学世界への批判を介して、公準と公準の下界との、分裂と対話に迫らなければならないが、吾々の関わる学も科学もその情報（対話なき一般意志）たる書物も、擬制資本空間に漂う断片、せいぜいのところ、労働貨幣に過ぎず、地上の楽園（ユートピア）信仰を支える、みじめな祈禱書に他ならないのではないか。

（京都大学学術出版会）

■学術書の原点

ニコラウス・クザーヌスと現代

聖学院大学総合研究所教授
渡邉守道

この欄では、出版をとりまく状況の変化の中で学術書の意味あるいは学術書が生まれる原点を確かめてみたいと思います。今回は長年アメリカのロングアイランド大学で教育・研究に携わってこられ、今年聖学院大学総合研究所教授に就任された渡邉守道先生にご専門のニコラウス・クザーヌス（一四〇一―一四六四）研究の現況を伺い、この主題について考えてみたいと思います。

――最初に伺いたいことは、現代において「知」が置かれた状況を先生はどのようにごらんになっておられるかということです。特に、オウム真理教事件でさまざまなことがいわれていますが、知が現実を批判したり、真理を追求するよりも、情報を使いこなすような意味で「マニュアル化」してきているのではないかといわれていますが。

渡邉　現代における「知」の問題は「価値」と分裂させてしまうという「危険性」だと考えます。おっしゃったように、オウムなどそのもっともはっきりした例だと思います。もっとも、彼らは彼らの価値観をもっているとも言えるでしょうから、「どのような価値」ということになってくるでしょうか。そうすると、人間性に基づいた、いまの言葉で言えば、ヒューマン・ライツを尊重するような、もっと宗教的（キリスト教的）にいえば、神と人を愛する価値体系に従う、というのが望ましいと考えられます。

クザーヌスによれば「知」「知識」「科学」（scientia, Wissenschaft）とは、被造者である人間が、創造者によってつくられた万物を理解しようとする努力ととらえられています。そのときに聖書のヨハネ黙示録五章十三節にあるように被造者は、天地のすべての造られたものと共に神を讃美すべきであるとされます。その意味でクザーヌスのscientiaは「讃美の科学」（scientia laudis）です。このことは彼の後期の著作『知恵の狩猟について』にとくに明らかに述べられていますが、そこには、神に対しては勿論自然に対する驕りはなく、「傲慢の科学」（scientia superbia）はありえません。彼が『知恵に関する無学者の対話』に聖書に基づいて書いているように「ほんとうの知識というものは人を謙虚にさせる」ものです。したがって「知」（scien-

tia）と「知恵」（sapientia, Weisheit）は密接な関係にあり、クザーヌスはしばしば両方の言葉を同意義に使っています。scientia laudis は sapientia に通ずるもので、sapientia とはクザーヌスにとって神とキリストを讃美することに他なりません。クザーヌスにおいては「知」と「価値」の分裂・分離は存在しないのです。

早稲田大学の八巻和彦教授が一九九三年のアメリカ・クザーヌス学会で「なぜ日本人はクザーヌスに興味をもつのか」という講演をされましたが、その中で「クザーヌスの思想は現代科学の諸問題を批判するのに非常に効果的である。科学はそれ自体独立で発達し、新しい情報を蒐集することのみを求めているが、クザーヌスの自然科学に関する考えは、H・バターフィールドが『現代科学の起源』（London, 1949）に説明したように、自然科学はキリスト教形而上学にその根源を持っており、われわれは神の真理に光をあてるために、この世界を神の創造物として研究すべきである。クザーヌスはあまり多数の余りに速急な研究は人類を真の scientia から隔離して、人類を傲慢に導くと警告を発している」と語られましたが、傾聴に値する指摘です。

――そこで日本におけるクザーヌス研究ですが、最近『学識ある無知について』が出版され、クザーヌスの著作のうち主なものが翻訳されています。また、日本クザーヌス学会『クザーヌス研究序説』、薗田坦『無限の思惟』、などが出版されています。クザーヌスの研究が、日本でなぜこのように盛んなのでしょうか。

渡邉　山田桂三先生の新訳が出版されたことは、日本におけるクザーヌス研究と理解のために喜ばしいことと思います。現日本クザーヌス学会会長の大出哲教授が、岩崎允胤先生と『知ある無知』を一九六六年に上梓されていますが、今回の新訳は近代科学と哲学の関係に深い関心をもたれる研究者によるものであるうえ、文庫版で出版されたことは、クザーヌスの主要哲学書の普及という点から考えて、プラスであることは否めないといえましょう。

たしかにクザーヌスは日本では、まだ比較的に知られていない思想家といえますが、彼に注目した先人がいなかったわけではありません。下村寅太郎先生が太平洋戦争以前に、演習などでクザーヌスを取り扱っておられたことは割によくしられ、山田教授もその「訳者あとがき」で下村先生によってクザーヌスへの眼を開かれたと明言しています。が、もっと遡って一九一一年出版の西田幾多郎著『善の研究』を繙けば、そこには二箇所で明らかにクザーヌスの名をあげて彼の思想に触れています。西田哲学の基本概念の「絶対矛盾的自己同一」はクザーヌスの有名な「対立の一致」（coincidentia oppositorum）の思惟に親しんだ者には類似のものと思われるでしょう。

しかしながら日本のクザーヌス研究が地に着いたのは、やはり第二次世界大戦以後のことで、上智大学のP・ネメシェギ教授と北海道大学の大出哲教授によって、一九七一年に発足した日本クザーヌス協会が、一九八二年に発展し

て、日本クザーヌス学会となり、クザーヌス研究に努力してきた結果によるものです。学会大会もその第十三回が一九九四年十一月に早稲田大学で開催されました。邦訳も『隠れたる神』（一九七二）、『可能現実存在』（一九八七）、『非他なるもの』（一九九二）、『光の父の贈りもの』（一九九三）が別々に出版されたほかに、「創造についての対話」「知恵に関する無学者の対話」「信仰の平和」「テオリアの最高段階について」が、上智大学中世思想研究所刊行の「中世思想原典集成十七」として『中世末期の神秘思想』に収められています。なぜクザーヌス研究がこのように日本でも盛んなのか、という問題は回答に多くの紙数を要することでありますが、結局は、クザーヌスの過渡期思想家としての、独自の、しかも種々の影響を受けた思想そのものの含蓄と複雑さにあるのではないかと思います。わたしのように彼の哲学・神学思想よりは政治・社会・法律思想に興味を持つものもあるし、以前から彼の科学思想、数学概念にもかなりの注意がむけられ、研究がなされてきました。いわゆる「学派」の創立者とならなかったクザーヌスが、後世にどのような影響を及ぼしてきたかについていろいろ議論されてきましたが、わたしはやはり影響よりは彼の思想の独自性のほうが興味の源泉であると思います。

――ヨーロッパやアメリカのクザーヌス研究はどのような傾向・特徴がありますか。

渡邉　わたしの知っている限りでは、一九六〇年設立のドイツの「クザーヌス協会」と一九八一年創立の「アメリカ・クザーヌス学会」が存在し、スウェーデン、ノルウェー、オランダにもクザーヌス研究者が活躍しているけれども学会ないし協会を組織するには至っていないようです。

クザーヌスの本国であるドイツにおける研究の最も重要な分野は、クザーヌス全集（Opera omnia）のハイデルベルク版の出版です。一九三二年にE・ホフマンとR・クリバンスキーによってはじめられ、予定数の十四巻のうちの大部分は出版したものの未完了で、現在も進行中です。それに加えて一九七〇年からは Opera omnia の一部として、現存する三〇〇に近いクザーヌスの説教のうち六十七が編集・出版されました。さらに以上の Opera omnia と並んで、一九七六年からクザーヌスに関係する現存の記録をすべて蒐集するという野心的な出版 Acta Cusana がはじまり、これまで第一巻の第一、第二分冊が上梓され、第三分冊も近く出版の予定です。中世の思想家で、これほど詳細にわたってその生涯に関係する文書を蒐集・出版されている人は、クザーヌスをおいて無いといえましょう。

以上のようにドイツにおけるクザーヌス研究は、いわばその基本作業ともいうべき資料の徹底的、批判的集成化・出版ということが根底となっていますが、最近のドイツにおけるクザーヌス研究の動向をみて、さらに感ずることは、第二次世界大戦以前にはとかく『無知の知』の重要性をあまりにも強調してほかの、特に後期の著作に注意を払

わなかった研究者がもっと関心をひろめてほかの著作をも研究の対象に入れるようになったことと、クザーヌスをドイツ文化研究の観点からみていた研究者がルネッサンス、人文主義との関連においてクザーヌスの理解を図ろうとより努めるようになったことではないでしょうか。

アメリカにおけるクザーヌス研究は、P・E・ジグムンド教授とわたしの著書が一九六四年に別々に出版されたのがやはり戦後における画期的な出来事であったといえましょう。両書とも、クザーヌスの政治思想を取り扱ったもので、それまでクザーヌス研究の中心対象であった哲学・神学に関するものでなかったことは、アメリカ・クザーヌス研究の将来の発展を暗示するものであったかもしれません「アメリカ・クザーヌス学会」は毎年、ミシガン州カラマズーの西ミシガン大学で行われる「国際中世学会」で哲学・神学・歴史の三分野に分かれて三つの分会を開き、クザーヌス、及びそれに関連したテーマについての研究発表を行ってきました。それに、一九八八年から二年毎にゲティスバーグで会合を開き、毎回クザーヌスの主要著作の一つをとって研究・討議をしてきました。ここで発表された論文の多くは E. J. Brill 社から学会の名の下に出版された『クーザのニコラス・神と叡知の探究』に収められ、それにつづく第二巻もほとんど完成しています。

アメリカにおけるクザーヌス研究の特徴といえば、彼の哲学・神学の研究にあたって『無知の知』以外の特に後期の著作、例えば『知恵の狩猟について』とか『観照の頂点について』にも十分の注意を払ってきたこと、クザーヌスの哲学・神学思想の研究にとどまらず、彼の教会法学者、教会史家、教会政治家としての業績についての研究も推進してきたこと、さらにクザーヌスを孤立した思想家として取り扱わず、過去の彼に影響を与えた思想家はもちろん同時代の哲学者、神学者、政治思想家、法律学者などとの関連においてクザーヌスを捉えようとしてきたことです。

――ニコラウス・クザーヌスは先生のご専門の政治思想において、どのような現代的意味があるでしょうか。

渡邊　「現代的」意味ということから考えれば、彼の「立憲主義的」思想、同意の概念、改革の思想、それにイスラム教理解の努力が主なものであると考えます。

第一の点については、彼の主要著作、『普遍的和合について』が最もよく表現しています。十五世紀の教会の大分裂の後、それに対応していわゆる公会議運動（Conciliar Movement）が起こって、使徒ペテロの後継者である教皇でも、信仰に関し、教会分裂の排除に関し、また教会改革に関しては、教会の代表機関である公会議に従属するという公会議至上主義を掲げるようになりました。G・マッティングリー教授は中世のカトリック教会は、後年、近代国家が当面した官僚制度、外交組織、税制度などの重要問題にすでに取り組んでいた、と書いていますが、教皇の権力を公会議が制限するという十五世紀の問題は十七世紀のイ

ギリスの国王と議会との葛藤による立憲制度、議会主義の確立という事態と本質的には同様であると言えます。「公会議運動の最もすぐれた教科書」とまでよばれた『普遍的和合について』がどのような影響を後世に及ぼし、また現代的意義を持っているかは、さらに検討すべきことです。

第二の同意の概念ですがこれは第一の点と密接な関係を持っています。クザーヌスによれば、教会及び教会外における政治的決定、法律の制定にあたっては、それらの有効性発揮のために同意が必要条件である、とされました。これはかの有名なジョン・ロックの『統治二論』にある同意の概念と同じで、ロックがクザーヌスの影響をうけたか、どうやってか、と議論されてきたのも当然といえましょう。現代民主主義思想の中心概念である「同意」にクザーヌスが関わっていることは明白です。

第三の改革の思想は、クザーヌスが当時の教会の現状をみて教会の革新をもたらそうとしたわけですから、特に教会改革に関連すると見られますが、その問題は現在でも解決されていないことは間違いありません。けれども、クザーヌスにとっては、当時の教会外とくにドイツ帝国とその選挙候選挙法の改革ということも真剣な問題で『普遍的和合について』はかなりの頁数をこの議論に費やしています。これらは現代の政治問題から見れば過去のことですが、改革の精神自体は現代でも有意義であると思います。

最後にイスラム教に対するクザーヌスの態度があります。一四五三年にイスラム軍の攻撃によってコンスタンチノープルが陥落したことは、すばやくヨーロッパ各地に伝えられ、人々はイスラムの恐怖におののいたわけです。その時にあたって、クザーヌスは武器で対抗するのではなく、イスラム教を理解し、説得でイスラム教界とキリスト教世界の和合・平和を保とうという立場をとりました。その現れが『信仰の平和について』(一四五三)、『コーランの精査』(一四六一)です。現在、ボスニア地方でイスラム系の勢力とキリスト教系の軍隊が不可解なほど複雑な関係で争い、今後どのように展開していくのか予測もできない現状です。それを目前にして、クザーヌスのイスラム教に対する解決策は現代のわれわれに示唆を与え、問題との真剣な対決をせまっていると思います。

――最後に先生は『ニコラウス・クザーヌス』をまとめられると伺っていますが、どのような本になりますか。

渡邉　数年前に執筆の準備をはじめましたが、アメリカ・クザーヌス学会会長とNewsletter編集・発行者としての仕事でなかなかはかどらないのですが、本そのものは、いままでお話してきましたように、外国のみならず日本でも強調されてきたクザーヌスの哲学・神学に限らず、クザーヌスの社会的、政治的、法律的な思想にもふれ、孤立した空白地帯に存在するクザーヌスではなく歴史的地点にたったクザーヌスの全体像を描きだしたいと願っています。

(聞き手　山本俊明)

体験的助成出版論

竹中 英俊

「学術出版において助成出版は例外ではない」――このことを最初に確認したい。対象とする学問分野によって、この命題の妥当性のレベルは変わり得る。しかし、助成出版がどのようになされているか、その実態を類型化することによって、「少部数出版だけが助成出版ではない」ということが確認できるだろう。

具体的に助成出版がどのようになされているか、類型を挙げてみる。

第1類型　需要が少ないと目される優れた企画で、少部数出版を実現するためのタイプ。

第2類型　少部数出版ではないが、実現に当たってコストが高く、危険負担が予想され、それを軽減するためのタイプ。

第3類型　普通企画になるが、より多くの普及を意図して定価を抑えるためのタイプ。

第4類型　助成による「公的規制」の締切を利用し、背水の陣で優れた企画の実現を目指すタイプ。

第5類型　助成団体が高い審査機能を持ち、それを通ることが刊行物のプレスティジを高めるタイプ。

第6類型　大学・財団などの助成制度があり、それに適合的なタイプ。

実際にはこの類型の複合形態が普通である。学術出版に当たっては、助成制度を積極的に開発・利用し、選択・複合を図るならば、助成出版が例外的なものではなく、むしろ出版社の主体的な活動の一部であることが確認できるのではないか。出版社による助成制度の主体的な選択・複合が、一つ一つの企画を実現し、危険負担を軽減し、定価を抑える道を切り開くのである。

一般に学術出版にあたっては、「知識・見識・算式」を必要とするが、助成出版では特にこのことが求められる。企画開発にさいしては対象分野に対する「知識」が求められる。また、開発企画が自社にふさわしいのか、パブリッシュした時の評価はいかなるものか、世界に対するどのよ

うなインパクトを与え得るか、これらを見通す「見識」も必要である。さらに、部数見込み、コスト計算、定価見込み、これらを予測する「算式」の能力も求められる。一般企画による出版よりも、助成出版のほうが相対的にこの「知識・見識・算式」を必要とする。

また、助成を受ける側としては、企業による財団活動に理解を示し、フィランソロピー（社会慈善事業）の条件をつくる努力をしなければならない。例えば、「本業が芳しくない」「金利が低い」などの理由により、財団活動のレベルが低下する場合があるが、それは浮沈のある社会における自然なことと受け止めたい。厳しい環境条件のもとにおいても、フィランソロピーに真剣に取り組んでいる財団関係者を私たちは理解し支援する用意を持つべきである。

優れた学術書を実現するためには、企画開発および著者開発が必要である。そのための一つとして、出版社がルートを持つ財団などの研究助成を著者に紹介する努力も必要である。研究助成を受けた優れた企画を刊行助成につなげることが可能なケースもある。逆に研究助成のリストから企画を開発できる場合もあり得ることも意識しておきたい。

以上のようなことを実現するためには、出版社の環境を整備する必要がある。刊行助成は一般に書類の手続きが面倒であり、また刊行期限が決められている。それをこなすことのできる出版社の態勢をつくる必要があり、また逆に、実現可能な出版助成を選択・複合する必要があろう。付言するならば、出版助成の候補企画は、原稿ができているものに限るという原則を立てることも一つの方策である。著者の理解を得られるならば、この原則を立てることは無理ではないはずである。

なお、言うまでもないが、刊行された本は、読者にとって、それが助成を受けたものかどうかは、関係がない。内容が弱くて売行部数が望めないために助成出版を受けるものが皆無ではないが、そのような本に対して読者は敏感であること、このことについても出版社として自覚しておきたい。

一般に学術出版社は清貧であることをイメージされ、また好むと好まざるとにかかわらず強いられていることも多いだろう。しかし、この状態を克服する道を模索することも必要なのではないだろうか。そのことによって出版社が体力を付け、学術書刊行の環境条件を作り出すことができるならば、日本の文化、ひいては世界の文化を発展させ、豊かにすることに結び付くからである。

（東京大学出版会）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク

マルチエデュケーション
東海大学社会教育センターを訪ねて

夕暮れともなれば若い恋人達でにぎわう三保半島だが、浜辺で愛を語る前に見るべきものがある。

★

清水市三保の半島の先端に位置する「東海大学社会教育センター」には、二五万平方メートルの敷地内に、三つの博物館をはじめ、野球場やスイミングプール、テニスコート、総合運動場等があり、さらに四八〇人収容の研修施設も整備され、毎年六〇万人ほどが利用している。

さて今回はこの中から、「海洋科学博物館」を中心に、「人体科学博物館」、「自然史博物館」の三つの博物館を訪ねてみた。

★

今年開館二十五周年を迎える海洋科学博物館は、一階が水族館、二階がマリンサイエンスホール（科学館）とメクアリウム（機械水族館）により構成されている。

まず三五〇種の魚が飼育されている水族館であるが、何といっても六〇〇トンの大海洋水槽が目を引く。マグロやサメなどの大型魚を中心に四〇種二〇〇〇匹が泳いでいるそうだが、美味しそうな魚が泳いでいるなどと不遜な考えが頭をよぎり、大型海水魚の飼育の難しさや科学的な説明は聞き逃してしまった。サンゴ礁、岩礁、藻場、砂底と4通りの海底が再現されている。このほかに、津波の実験水槽がおもしろい。高さ一五メートルの大津波を五〇分の一の縮尺で再現するもので、ミニチュアの町並みを襲う波はまるで映画の一シーンのようである。

次のマリンサイエンスホールでは、中央にある全長一八メートルのピグミーシロナガスクジラの骨格標本だけに目を奪われてはいけない。これはあくまでも客寄せパンダ。おもしろいのは周囲の展示物である。さざ波から荒々しい巻き波に発達する過程を見せてくれる波の水槽、波の力で進む舟の模型、海洋探査の成

海洋水槽

機械のマンタ

果など、海の科学をあらゆる方面から紹介してくれる。展示物の幾つかは実際に触ったり、動かしたりできるので、納得いくまで体験できる。

メクアリウムは、メカニカルとアクアリウムの合成語で、魚やその他海洋生物のロボットが泳ぎ（動き）回っているところである。むかし学研のメカモというオモチャがあったでしょう（若い人は知らないと思う）。これらの機械生物（メカニマル）が四〇種一五〇匹も〝生息〟しており、その多くは入館者が自分で操作できるようになっている。機械とはいえリアルな（あるいは滑稽な）動きに妙に親近感を覚え、自宅で飼ってみたくなったが、さすがに「売って下さい」とは言えなかった。また、ここには世界初の3Dハイビジョンシアターがあり、マンタの泳ぎを立体映像で上映している。この方式は今後、飼育の不可能な動物を展示するための有効な手段となろう。

★

博物館自体を人体にみたて、入場者は口から入って肛門から出るという、何とも凝った構成になっているのが人体科学博物館。しかも入り口は巨大なマリリンモンローの唇、その奥にはパンチボールのノドチンコが下がっている。

博物館の餌である入場者は、脳や肺といった各器官をめぐるうちに、その機能や仕組みが理解できるようになっている。映画「ミクロの決死圏」のような冒険は期待できないが、人体の中を歩き回るという奇妙な体験ができる。

★

生命進化のトンネルというコンセプトで、先カンブリア紀から新生代まで、化石・骨格標本を中心に展示されているのが自然史博物館。圧巻は体長二八メートルのディプロドクス。その他にも多数の恐竜が入場者を迎えてくれる。

★

大学の教育施設というと、何か小難しく堅苦しいイメージがあるが、ここは総合文化施設として老若男女誰でもが楽しめるテーマパークであった。今回訪ねた博物館も、ただ展示物が並んでいるだけのものではなく、立体映像を導入したり、入場者に実際に体験してもらったりと、五感すべてに訴える構成になっている。今流行の言葉を使うなら、大学教育もマルチメディアである。（小野朋昭）

モンローの唇

恐竜の展示ホール

東海大学社会教育センター
〒424 清水市三保2389
TEL (0543)34-2385
12月21日～1月1日休館
交通：ＪＲ清水駅より三保ランド行きバス終点下車

大学出版部ニュース

▼一九九五年度夏期研修会
本年度の夏期研修会は、八月三一日（木）～九月二日（土）の三日間、栃木県喜連川温泉にて開催。日韓大学出版部合同セミナーの日本開催年ということもあって、韓国大学出版部協会の一五名を加え、総勢七八名になる盛会でした。セミナーは山下正幹事長の歓迎の挨拶の後、韓国側代表として、建國大学校の朴永命出版部長の挨拶で開会。「学術書の企画開発」を題に日韓双方から三名の講演者が発表。

昨年の韓国で行われたセミナーで提案された「実務者レベルでの交流」に応えるように、韓国側も半数が実務担当で構成され、熱心な意見が交わされました。

北海道大学図書刊行会

加藤智章著『医療保険と年金保険―フランス社会保障制度における自律と平等』（A5判・八二四〇円・日本生命財団出版助成図書）第二次大戦直後に策定されたフランス社会保障制度の展開過程を、国家、社会および個人の位置付け、相互扶助と自助努力のあり方、職域保険制度と地域保険制度の利害得失等の基本概念から考察。社会保険制度の成立から一九八〇年代後半までの変遷を、自律と平等という二つの原則を軸に、豊富な資料に基づき詳細に実証分析した力作！

Z・メドヴェージェフ著／佐々木　洋訳『ソヴィエト農業―1917―1991』（A5判・六六九五円）ソ連邦の政治経済体制において決定的な役割を演じてきた農業問題について、レーニンからゴルバチョフに至る歴代指導者それぞれの狙いや、彼ら固有の手法に検討を加え、またソ連邦経済の集団化部門と個人部門の間に生じてきた厳しいせめぎあいを軸に解明。「歴史としてのソヴィエト社会主義」の基底をなす農業問題を、政治・経済そして科学・技術の面から鮮やかに浮き彫りにする、ソヴィエト農業分析の決定版！

聖学院大学出版会

▼山本鐐造著『総合経済政策序論』（仮題）を準備中

▼著者は伊藤忠商事、財団法人国際開発センターなどを経て、現在、聖学院大学政治経済学部教授。国際経済学会会員や日本経済政策学会会員でもある。

▼「政治と経済の懸け橋、政策の一体化、国内と国際の政策の有機化」を念頭に置いて執筆した、と著者は語る。日本が、今後どのような政治的・経済的効果を期待しうるかについて「分析・考察・予測」した書。

▼「転換期の世界の政治と政策」、「経済運営の主体と政策決定のシステム」、「政策の総合的価値判断の歴史」、「政策の理論的基礎『厚生』」、「発展途上国の成長理論」、「財政政策：公共財への投資」、「経済安定化政策」、「経済発展政策と政治・戦争」、「政治・経済に対する環境、文化からの挑戦」などの章があります。

慶應通信

▼開発の国際法（高島忠義著）開発の国際法とは、「北」の先進国と、アジア・アフリカ諸国にラテン・アメリカ諸国を加えた「南」の国との対話と協力により新しい国際法を創設しようとするもので、本書はこのような国際法の内容を、企業活動、通商、財政技術援助、国有化、環境などの分野を取上げて実証的に分析している。（A5判四六〇頁・四八〇〇円）

▼解説宇宙法資料集（編集代表栗林忠男）宇宙の開発・利用が進展した今日、宇宙法研究の便宜のために関連資料を、主要条約、個別条約・決議等、関係機構、国際協力、各国の国内法制等に分けて集録し、各々に簡潔な解説を付している。（四六判四二〇頁・四二〇〇円）

▼日本外交と中国 一九四五―一九七二（添谷芳秀著）戦後日本外交の画期的事件である七二年の日中国交正常化への道のりを、国際政治の分析手法により克明に辿った研究書。特に当時国際政治環境の制約を強く受けていた政府の政策と、独自の中国観から積極的に日中関係の打開に努めた非政府セクターの役割に注目する。（A5判三〇〇頁・三八〇〇円）

産能大学出版部

▼『完全図解版CALSのすべて』（岩渕幸雄・小泉幸一著、一六〇〇円）CALSが日本産業界にも知られ始め、その概念・定義・発展性等について、ビジネスマンは情報収集、資料収集に躍起になっているのが現状である。ここ数年のうちに具体的な姿が見えてくると思われるCALSについて、本書は同時進行的スタンスで体系的に構成されている。ビジネスに、業界にどう関係していくのか、マルチメディア関連とどう整合していくのか、新規事業の展開についてのヒントは……。製造業からサービス業にいたるまで、役立つ最新情報を、CALSの第一人者たちが完全図解により解説。

▼『あなたもアメリカの大学で学んでみたら』（生田哲著、一六〇〇円）「入学するのは易しく卒業するのが難しい」といわれているアメリカの大学。ではどのようにすれば、アメリカの大学を卒業できるようになるのか。本書は、実際の大学生活の体験談、日本と異なる大学システムを具体的に解説し、上手な留学の方法を述べる。特に四年制大学卒業のための短大からの編入方法も詳述。

玉川大学出版部

▼市川昭午・喜多村和之編『現代の大学院教育』（五三五六円）　最近の高等教育が当面する諸問題の中でも最重要の課題となってきている大学院教育の問題。本書は、研究機関とともに教育機関としての大学院について多面的に考察することにより、その将来を展望する。

▼A・W・コーンハウザー著／山口栄一訳『大学で勉強する方法』（一〇〇〇円）シカゴ大学の新入生用として作成され、数十年にわたって使用されてきた実践的、単刀直入な勉強法のガイドブック。勉強するということはどういうことなのか、そのためにはどう取り組めばいいのかが、コンパクトなページに収められている。大学のみならず、高校等の教育の場で今すぐ実行できる学習の手引。

中央大学出版部

▼川村泰啓著『個人史としての民法学―思想の体系としての比較民法学をめざして―』（四九四四円）

我妻民法学・川島所有権法の理論・来栖民法学・磯村民法学・磯田市民法の理論等の諸権威による呪縛からみずからを解放すべく研究しつづけてきた道程、つまり既存の問題史や文献をなぞることを潔しとせず、常にみずからの問題関心に忠実に、自前流の「なぜ？」を追求しつづけてきた著者が、その著書・論文を公にしてきた者としての責任を全うすべく、学問の個人史として、その足跡を綴る。

▼安藤淳平著『21世紀の環境と対策』（二五七五円）

21世紀はエネルギーと食糧の供給不足による苦境の時代と推測される。資源と大きさの限られた地球で人類が持続的幸福を図るには、環境を深く理解し、対策を効果的に進める必要がある。いわゆる汚染物の多くは自然界に大切なものであり、人間が過剰に排出し有害としたにすぎない。自然の大きな力と協調し、科学技術の発展の方向を見直し、すべてを生かして扱うことが重要であると論述。

専修大学出版局

▼ミャンマーのパダング族には、女性に金銅の首輪をはめて人工的に首を長くする風習がある。彼らにとって「首の長さ」と「美人」は同義語らしいが、われわれの感覚にはなじみにくい。文化が異なれば「身体観」も異なるということである。『身体観の研究―美しい身体と健康―［新版］』（松浪健四郎・荒木祐治著、定価三三〇〇円）の両著者は「美しい身体とは何か」というテーマを、お多福、浮世絵、先のパダング族などを題材にして論じている。古来、人間はそれぞれが属する文化的慣習に従って理想とする人物を表現し、時には身体そのものに手を加えてきたのだが、体育実践者としての立場から世界各地の「身体観」を一望しているのが、本書である。▼フランス語を学ぶ上で、日本語との比較をどう考えるかは大事である。そのための珍しい試みが、『Si nous parlions du japonais en français…』（山本慧一・相羽秀伸著、定価一四〇〇円）である。これはフランス語の中級教科書であると同時に、フランス人の日本語入門書でもあり、難解な二国語の交錯的な小論が展開されている。

東海大学出版会

▼金原保夫訳『ビザンツ帝国とブルガリア』（定価三七〇八円）

ブルガリア史をビザンツ帝国との関連において再構築しながら、同時にヨーロッパ社会形成の一要素となった「東欧諸民族とビザンツ帝国」という構図を明らかにしてゆく。

▼日本地質学会環境地質研究委員会編『地質汚染の責任』（定価二八八四円）

地質汚染が大きな環境問題となっているが、多くの場合、対症療法的な対策がとられているに過ぎない。本書では、技術的・法制度的側面から、有機塩素系化合物による地質汚染の具体的事例と、根本的な浄化対策を紹介する。

▼牧島邦夫著『衣服の科学』（定価四三二六円）

衣服と着衣現象を主に人文科学的に考察し、仮想としての衣服科学と既存の被服学との橋渡しを目的とする。著者は、実学としての「被服学」とは異なる「衣服科学」を提唱し、物理学・哲学・心理学・記号学・生理学・被服学など、さまざまな分野の知識と方法論を導入して「衣服と着衣現象」を解読する。

東京大学出版会

▼楊寛著『歴史激流　楊寛自伝―ある歴史学者の軌跡―』（西嶋定生監訳・高木智見訳、定価八二四〇円）　菊判9ポ二段組五〇〇頁という大部な本である。訳注・解説・著作目録・人名索引なども完璧、本の性格は確かに学術書だ。だから刷り部数は一五〇〇と少ない。しかし、内容は実に興味深い、ドラマチックでさえある。でも本の厚さと定価がこの本の普及を拒むだろうな、一五〇〇は刷り過ぎかもしれないな、難しいところだ。

さて現代中国を代表する古代史家楊寛先生は一九一四年生まれで、現在も健筆を振るわれている。先生の生きてきた時代が、いかなる意味で「歴史激流」期であったか説明には及ばぬだろうが、「人民の災難・文化の破壊・経済の崩壊・風紀の堕落」をもたらした文化大革命期における先生の生きざまが、本自伝の中心部分をなしている。そこには、自伝が書かれなかったら歴史の闇に葬り去られたであろう数多の知識人の姿も、挫折、敗北、自滅していく人間として、謀略、裏切り、冤罪の実相とともに描かれる。凄い本です、読んでみてほしい。

東京電機大学出版局

▼コンピュータの発達を受けて、数学を取り巻く環境が急速に変わりつつある。Mathematica といった優れた数式処理ソフトが登場し、研究者が利用し始めている。一方、ハードウェアの進歩により普及も急速で、本学でも数百台のパソコンで同時に利用が可能となるなど、教育への活用が期待されている。高校でも指導要領の改訂によりコンピュータが積極的に取り扱われるようになってきた。

▼数学とコンピュータの結び付きは今後ますます重要となるが、それだけに教員の養成や教科書、指導方法など、工夫の余地がまだまだある。小局でも多くの著者の参加により「新・数学とコンピュータシリーズ全十巻」の刊行を開始した。数学教育の一助となれば幸いである。

新・数学とコンピュータシリーズ1
コンピュータ言語と処理
片桐重延監修　A5判　定価1751円

東京農業大学出版会

▼『環境緑地学序説』　田村正人著

環境と緑は、人間が生活していく上でたいへん重要であることは、言うまでもない。しかし、その環境と緑あるいは、人間との関係をどのように捉え、保護しあるいは管理し、あるいは創造するか、となると、簡単には答は出ないであろう。

本書は、人類にとって豊かな生活空間を創造してくれる緑の自然環境を、時間的・空間的に調査、分析、評価し、適正に保全、管理、回復、創出するための入門書である。

たとえば、環境という言葉一つを取っても、その意味や語源には、興味深いものがある。又、人間が、環境をどのように感じているかは以外と知っているようで知らない、つまりいくつかの角度からの見方があるようだ。さらに最近よく使われる「環境アセスメント」とはどのような意味で、どうして必要となるのか。

環境緑地といった場合、それは単に草や木が生えている土地という意味ではない。土も川も池も含まれる。昆虫も動物も。それは、そこに生命が宿っているからである。

東京理科大学出版会

明日をひらく科学教養誌――『SUT BULLETIN』

8月号は光ファイバ通信に焦点をあて、通信システムから光源、ファイバ等のデバイズや材料に至る最近の進歩を紹介した「光通信」の特集が組まれている。ほかに、毒のはなしでは「キノコ」。科学教養講座では「阪神大震災」「農薬による環境汚染と動態」。材料シリーズでは「半導体材料はいま」等、現在それぞれの分野で活躍している方々が執筆している。

便利でお得な年間購読（送料当出版会負担）をお奨めする。

年間購読料五八〇〇円

9月号は、軽く、小さく、強い電池が特集である。

法政大学出版局

アリス・K・ターナー著／野崎 嘉信 訳

▼『地獄の歴史』　四六判・四四二九円

古代エジプト、ギリシアからローマを経て、中世、ルネサンス、そしてロマン派からフロイトの時代にいたるヨーロッパの宗教、文学、演劇、美術、哲学、神学を縦横に検証しつつ、四千年におよぶ地獄観の変遷をあとづけた実証的な〈地獄の地理学・建築学〉、〈冥界の歴史・民俗博物館〉。

ダンテ、ミルトン、ゲーテらの生きた時代を検証し、機械的合理主義や啓蒙思想、ロマン主義をも分析した本書は、観念の世界に〈地獄〉を生み出し続けてきた民衆のダイナミズムにも目を向ける。図版一一二点（内カラー三〇頁）を収録

地獄の口

放送大学教育振興会

▼平成八年三月刊行予定の七六点の編集業務は、おおむね順調に進行中。同時並行で、平成九年三月刊行予定の七七点についても、早々に主任講師会議をすませ各科目別の執筆者・編集担当者・テレビ&ラジオのディレクターの打合せが、猛暑のなか、連日行われている。

▼一方、放送大学では、他大学との連携協力の一環として、「単位互換」の実施を進めている。「大学設置基準の大綱化」により、各大学が時代の流れに沿った多様な高等教育を展開することが可能になったため、豊富な科目を開設している放送大学との単位互換（放送大学の単位をその大学・短期大学の単位として認定）を希望する大学・短期大学が増加中である。平成七年五月に「単位互換協定」を締結した金沢学院大学で八三番目。その内訳は、四五大学（国立三、私立四二）、三八短期大学（国立一、私立三七）。各大学・短期大学の学生は、放送大学の特別聴講学生として、所定単位数の範囲内でわが出版部が編集・発行した印刷教材を中心に、各科目を履習して、単位認定試験に合格して、単位を認定される。

明星大学出版部

▼小山俊也著『教育行政の原理・組織』改訂増補版

本書は、一九八八年に大学の教育行政あるいは教育行財政のテキストとして出版したものであるが、今回刊行するにあたり、新たに補注と巻末にソ連・ロシアに関する記述を加えた。本書の特色は、わが国の教育行政の基本原理、組織・運営、関係法規等に関する解説・考察を中心にしながら、教育行政の法制以外の側面にもできるだけふれ、外国の教育行政組織についても記述していることである。

▼井関正昭著『日本の近代美術入門 1800～1990』

本書は日本の近代美術についての入門書であり、大学のテキストとして執筆されたものである。概説書であるが、歴史の一つの流れをそれぞれの時代相の中から抽出して、独断や偏見も交えながら、できるだ特徴的な部分に焦点をあてて構成されている。切り口にはいろいろな方法があるはずであるが、日本の近代美術におけるリアリズムの課題は、最も切実な部分であると著者は述べている。

早稲田大学出版部

▼早大理工総研シリーズ③『建築の光熱水原単位〔東京版〕』（尾島俊雄研究室、定価二〇〇〇円）、④『沙漠緑化への途』（村井資長編著、定価二〇〇〇円）を刊行した。③は建築の設計・管理に不可欠な最新のデータ集。④はピート（草炭）を活用して沙漠緑化を試みる壮大な計画。

▼『私の大学論』（奥島孝康、定価二九〇〇円）を刊行した。斬新な大学改革を推進する早大総長による大学論の決定版。早稲田大学の未来像、サバイバル時代への私大の対応のあり方、国際化・情報化推進計画、財政問題の考え方、新中央図書館建設を含む図書館論など、体験的な大学論が並ぶ。大学人をはじめ、幅広い人びとにとって示唆に富む一冊である。

名古屋大学出版会

▼渡辺誠著『日韓交流の民族考古学』（定価六九〇一円）縄文時代のドングリ食・漁業から弥生時代の卜骨・鳥形木製品、さらには近世の瓦・木綿にいたるまで、物質資料の比較を通して日韓の持続的な交流の実態を解明し、新たな物質文化史の構築を提唱する。

▼藤井隆至著『柳田國男　経世済民の学―経済・倫理・教育』（定価六六九五円）「柳田学」の根源的問題意識とは何か？「農政学から民俗学へ」の転身挫折説を退けて、農政学の深化発展による経世済民の学として、全思想体系を解読する。

▼Ph・ディーン著／中矢・家本他訳『経済認識の歩み―国家と経済システム』（定価三二九六円）経済学の成立から現代までの歩みを、市場と国家の関係を軸に、道徳・科学・政治等の広い歴史的視野から描く。

▼大西英爾・高橋進・園部治之編『昆虫の生化学・分子生物学』（定価四九四四円）生命科学の発展に昆虫を材料にした研究が貢献している。その重要なトピックス（内分泌系、発生の制御、遺伝子の発現、生体防御、進化）を解説する。

京都大学学術出版会

▼『科学と大学の将来―日米大学長は語る』江崎玲於奈・尾上久雄監修

日米41大学の学長がはじめて、大学改革をメインテーマに一堂に会したシンポジウムの報告。構成は大きく三部からなる。①科学技術の高度化と科学政策の進展が、大学と産業・行政の一層の連携を求める中で、科学の普遍性を保持するための新しい研究スタイルは何か。②環境に合った持続可能な開発のための科学政策の必要性。③国と学問の枠をこえた後継者養成、留学制度の課題。これらの、研究、教育に加え、高等教育・科学技術行政のあり方をも含めた議論は、新しい科学と大学像創出への提言でもある。

しかし本書はシンポジウムの記録であるだけに、米国と日本との、㈠科学技術の大学、産業界、政府の質的・量的分担率の相違、㈡大学における研究と教育との関係に対する考え方の違い、㈢大学がどのような人材を生みだすかの理念の異相差が、随所でかいまみられ、むしろ、これらの相違から科学と大学の将来を考える上での素材として価値をもつともいえる。

大阪経済法科大学出版部

▼立野保男著『弁証法論究』

弁証法に付着した観念的思惟の欠陥を克服し、世界把握のためのこの論理の人間的普遍性を模索するという著者渾身のライフワークの集大成。第一編「弁証法の予備概念」第二編「発展学説としての弁証法」第三編「弁証法の諸領域」第四編「主体的弁証法」

▼川久保公夫著『ドイツ経済史研究』

ドイツ初期資本主義現象の全体的な性格と、その歴史的帰趨を展望しつつ、中世から近世にわたる産業的進歩の基幹であった織維産業部門の商品経済化の過程と、中世都市における商品経済構造の推移の過程を考察したもの。付論は「中世ヨーロッパの農業政策と家族形態」マックス・ウェーバーと古代農業史」の二編

▼杉野明夫著『中国社会主義の再生』

一九七九年に市場型経済改革と対外開放政策へと路線転換させ、躍進しつづける中国経済。それはまさしく「中国社会主義の再生」というべきものであると著者は主張する。毛沢東主義による自力更生戦略から現在の開放政策までを概観し、中国の未来を見据える。

関西大学出版部

▼飴山實・小幡斉著『びっくり！ 微生物のはたらき 生活とバイオ』（定価一五〇〇円）地球上に三十五億年生き続けてきた微生物は、バイオテクノロジーの世界で無限に近いすばらしい働きをしている。私たちの生活を豊かにし、環境をきれいにする微生物の最先端技術をわかりやすく解説▼関谷俊彦編『勧進能并狂言尽番組』（定価二二〇〇〇円）延宝二年三月十一日から文化七年三月二十二日にかけての勧進能能組と狂言尽番組。道頓堀・難波新地など、すべて大阪で行われた詳細な記録。本書は能楽研究の垂涎の的である鴻山文庫旧蔵本であることと、江戸時代における大阪での勧進能・狂言の詳細な記録であることに価値がある。関西大学図書館影印叢書第一期第三巻▼田中茂和著『国際経済と産業組織―寡占と貿易・直接投資・収支調整―』（定価六〇〇〇円）主として完全競争下で展開されてきた国際経済理論と、主として閉鎖経済下で競争秩序を論じてきた産業組織論を、前者では独占や寡占へ拡張し、後者では開放経済へ拡張し、両理論の接合化を理論・実証の両面から試みる

九州大学出版会

▼金龍瑞『日韓関係の再構築とアジア』四六判・三七六頁・四一二〇円。著者は延世大学卒。東京大学大学院（博士号取得）。韓国外務部外交安保研究院副教授、崇実大学副教授を経て現在梨花女子大学教授。その間東京大学客員研究教授、九州大学教授を歴任。類稀な語学力を駆使、韓国や日本のみならず世界で通用する第一級の政治・行政学者。本書は日韓の政治社会の特質を剔抉して、葛藤と軋轢の絶えなかった日韓関係の是正と新しい可能性を模索、更にアジアもヨーロッパのような統合がもたらす利点とその必要性を自覚して、新しいパラダイムと新理想主義を形成し、アジア共同体を推進していくことによってのみ諸問題が解決されると主張する。▼アジア太平洋センター研究叢書刊行開始。第1巻『タイの工業化と社会の変容』小川雄平編著、二八八四円。タイは八〇年代後半から外資、とりわけ日本資本の「集中豪雨的な進出」を受けて急速な工業化の結果、タイ伝統社会は劇的な変化を経験した。本書は日・タイ両国の経済学者、タイ地域研究者、社会学者による国際共同研究の成果。

流通経済大学出版会

▼大学改革の試みが盛んである。盛んであるのは、大学の「生き残り」がかかっているからである。改革の方向は将来にある。だが、過去の経験を内に生かさない改革は、真の改革たりえないだろう。▼『流通経済大学三十年史』が描くのは開学以来の大学の歴史である。流通経済大学は、首都圏の周縁部という立地の不利にくわえ、出捐者に関わる不祥事件によって、存亡の危機に瀕した経験をもつ。危機の克服とその後の安定に至る歴史は、過去の経験の集積に外ならない。過去を振り返って、将来につなげることが本書の目的である。叙述は、部局史を排して、学園の言わば全体史の体裁を取っている。改革の諸方策を、全学園の中で位置付けるためである。大学経営の側面に多く頁を割いたのは、建学の理想という観点からのみでは、私立大学の実態は理解できないからである。現在、編纂作業が進行中で、年度内の刊行を予定している。もとより万人向けの読み物ではないが、「大学問題」に興味を抱く程の人ならば、一つの事例として参考になるだろう。

大阪大学出版会

緊迫のボスニア情勢、フランスの核実験再開…、いま、国連は。
時事論評に陥らず世界のダイナミズムをきちんと捉える専門書に挑戦！
▼最新刊＝国連創設五〇周年記念出版＝神余隆博（大阪大学教授）著『新国連論―国際平和のための国連と日本の役割―』（定価二五〇〇円／A5判・三〇四頁）
国連は、いかなる困難に直面しているか／国連は、無力か／国連の改革は、可能か／国連の平和のための機能は、空洞化しているか／国連を失敗させないために、どうすべきか／二一世紀を再び戦争の世紀にしないために、日本は、何をなすべきか…これらの問に、冷戦崩壊前後四年間の外務省における国連外交の経験を踏まえ、国際政治と国際法の視点から実証的に分析して答えた力作。
【推薦＝明石　康国連事務総長特別代表】
▼秋季刊行予定
新開陽一著『日本経済のマクロ分析』
赤木富美子著
『フランス演劇にみる女性の世紀』
村田路人著『近世広域支配の研究』
中川正澄著『アヌレンの化学』

新刊案内 '95・7～'95・9

（表示価格は税込みです）

■北海道大学図書刊行会
地質あんない 道北の自然を歩く　道北地方地学懇話会編　一六四八円
日本的経営とオフィスマネジメント
―ホワイトカラー管理の形成と展開　児玉 敏一　三六〇五円
Literary Perspectives: American Studies in Sapporo, Japan
北海道アメリカ学会編　七二一〇円

■聖学院大学出版会
■慶應通信
現代日本社会の変貌―国際化社会の内と外―
坂田 義教／栗岡 幹英編　二五〇〇円
ハワイ移民佐藤常蔵書翰―近代日本人海外移民史料―
柳田 利夫／赤木 妙子編著　三五〇〇円
民族・宗教・国家―現代アジアの社会変動―
慶應義塾大学地域研究センター編　一二〇〇円
卒業論文の手引（新版）　慶應義塾大学通信教育部編　一五〇〇円
新保険学総論　庭田 範秋　二九〇〇円

■産能大学出版部
リテイル・マーケティング革命　高谷 和夫　一五〇〇円
あなたもアメリカの大学で学んでみたら　生田 哲　一六〇〇円
動乱の時代の経営変革への飽くなき挑戦
M・J・カミ／渡部一元訳　一五〇〇円
大競争時代の新・物流システム　和多田作一郎　二〇〇〇円
CALSのすべて〈完全図解版〉　岩渕幸雄・小泉幸一　一六〇〇円
片の哲学　石尾 登　二〇〇〇円
住宅の原価公開　伴 祐爾・戸谷英世　一八〇〇円
消費「新潮流」のつかみ方　油谷 遵　一五〇〇円
サラリーマンの自分探し　藤江 俊彦　一五〇〇円
問題整理法　吉田 博　一八〇〇円
業務フローチャートの書き方　高原 真　二〇〇〇円
21世紀対応の研修戦略　岡部 博　二〇〇〇円
頭のいい者が会社を亡ぼす　佐藤 忠　一五〇〇円

■玉川大学出版部
少子家族 子どもたちは今　小川 信夫　一八五四円
精神分析と宗教　S・リーヴィ／渡辺 学訳　二四七二円
技術史教育論　前田清志編　四九四四円
日本語の音声表現―スピーチ・コミュニケーション―
長野 正　二四七二円
科学革命と大学　E・アシュビー／島田雄次郎訳　二二六六円
現代の大学院教育　市川昭午・喜多村和之編　五三五六円
人間の発達課題と教育
R・J・ハヴィガースト／荘司雅子監訳　四九四四円
植物生産のための環境学入門　片岡 勝美　二四七二円
大学で勉強する方法

A・W・コーンハウザー／山口栄一訳　一〇〇〇円
グローバルシステムの社会学
L・スクレアー／野沢慎司訳　四九四四円
大学大衆化の構造　市川昭午編　三二九六円
変動する社会と成人教育
J・ヴァインベルク／三輪建二訳　二八八四円

■中央大学出版部
国際外国為替法　上巻　ヴェルナー・F・エプケ／山内惟介監修／實川和子訳　五一五〇円
個人史としての民法学—思想の体系としての比較民法学をめざして—　川村　泰啓　四九四四円
都市政治の変容と市民　大原　光憲　三〇九〇円
21世紀の環境と対策　安藤　淳平　二五七五円

■専修大学出版局
身体観の研究—美しい身体と健康—［新版］　松浪健四郎・荒木祐治　三三〇〇円
今村力三郎訴訟記録　帝人事件㈥　専修大学今村法律研究室編　四三〇〇円
Si nous parlions du japonais en français…　山本慧一・相羽秀伸　一四〇〇円

■東海大学出版会
ビザンツ帝国とブルガリア　R・ブラウニング／金原保夫訳　三七〇八円
日本語　口頭発表と討論の技術
—コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために—
東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会　二五七五円
衣服の科学—ヒトと衣服との関係—　牧島　邦夫　四三二六円
高齢化社会の法的側面　立山　龍彦編著　二六七八円

地質汚染の責任〈地質環境と地球環境シリーズ2〉　日本地質学会環境地質研究委員会編　二八八四円
地盤と地下水汚染の原理　R・N・ヤンほか／福江・加藤・小松田訳　四六三五円
化石と生物進化〈新版地学教育講座⑥〉　地学団体研究会編　二五七五円
太陽系と惑星〈新版地学教育講座⑫〉　地学団体研究会編　二五七五円
自賛歌古注総覧　王　淑　英　一〇三〇〇円

■東京大学出版会
講座世界史3—民族と国家—　自覚と抵抗　歴史学研究会編　二四七二円
テクストのマフディズム
—スーダンの「土着主義運動」とその展開　大塚　和夫　二四七二円
〈中東イスラム世界3〉
動く大地とその生物—東京大学コレクションⅡ　大場秀章・西野嘉章編　二八八四円
日本人のなりたち〈モンゴロイドの地球3〉　百々幸雄編　二六七八円
異境の発見　樺山　紘一　二二六六円
日本近世雇用労働史の研究　森下　徹　七〇〇四円
行政手続法の理論　宇賀　克也　三九一四円
日中戦争期における経済と政治—近衛文麿と池田成彬　松浦　正孝　六五九二円
日本産業発展のダイナミズム　武田晴人編　五一五〇円
日本のメリトクラシー—構造と心性　竹内　洋　四三二六円
古地震探究—海洋地震へのアプローチ　萩原尊禮編著　五九七四円
縞々学—リズムから地球史に迫る　川上　紳一　三〇九〇円
乱流解析〈数値流体力学シリーズ3〉　数値流体力学編集委員会編　四七三八円

枢密院會議議事録82・昭和篇40　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇64　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇90　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之二　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之二　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
史料・太平洋戦争被害調査報告　中村隆英・宮崎正康編　一五四五〇円
科学する文化〈シリーズ学びと文化3〉　佐伯　胖・藤田英典・佐藤　学編　一八五四円
極北の旅人〈モンゴロイドの地球4〉　米倉伸之編　二六七八円
外から見た日本法　石井紫郎・樋口範雄編　一〇三〇〇円
交渉の本質―海洋レジームの転換と日本外交　山内康英　六一八〇円
日本型金融の歴史的構造　伊藤　修　四一二〇円
生活保護制度の社会史　副田　義也　五一五〇円
枢密院會議議事録83・昭和篇41　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇65　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇91　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之三　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之三　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
資本主義は人をどう変えてきたか〈講座世界史4〉　歴史学研究会編　二四七二円
神秘の中世王国―ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路〈中東イスラム世界4〉　高山　博　二六七八円
共生する社会〈シリーズ学びと文化4〉　佐伯　胖・藤田英典・佐藤　学編　一八五四円
最初のアメリカ人〈モンゴロイドの地球5〉　大貫良夫編　二六七八円
ベトナムの世界史―中華世界から東南アジア世界へ　古田　元夫　二六七八円
歴史激流　楊寛自伝―ある歴史学者の軌跡　西嶋定生監訳・高木智見訳　八二四〇円
知覚と生活世界―知の現象学的理論　村田　純一　四六三五円
刑法の基礎理論　林　幹人　三九一四円
現代政治の基礎理論　松下　圭一　三二九六円
健康観の転換―新しい健康理論の展開　園田恭一・川田知恵子編　四九四四円
20世紀資本主義Ⅰ〈技術革新と産業システム〉　橋本寿朗編　四七三八円
20世紀資本主義Ⅱ〈覇権の変容と福祉国家〉　工藤　章編　四七三八円
民族動物学〈アジアのフィールドから〉　周　達生　三七〇八円
枢密院會議議事録84・昭和篇42　国立公文書館所蔵　一六四八〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇66　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇92　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第五編之四　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円
大日本史料　第十二編之四　東京大学史料編纂所編　一五四五〇円

■東京電機大学出版局

〈新・数学とコンピュータシリーズ2〉
BASICによる数学の問題解法　片桐重延監修　一八五四円
〈新・数学とコンピュータシリーズ4〉
行列と線形計算　片桐重延監修　二三六九円
〈新・数学とコンピュータシリーズ7〉
数学ソフトによる曲線と図形処理　片桐重延監修　一八五四円

〈新・数学とコンピュータシリーズ8〉
数学ソフトによる数式処理と関数　片桐重延監修　二〇六〇円
学生のための MS-DOS & Windows　若山芳三郎　中村隆一他　一八五四円
学生のためのC　宇山　靖政　一五四五円
基礎からのデジタル信号処理　二八八四円
新システム監査試験の徹底研究
日本ユニシスシステム監査研究会　二七八一円
システムアドミニストレータ試験受験テキスト　荒川　幸式　一九五七円

■東京農業大学出版会

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局
世界・テキスト・批評家　E・W・サイード／山形和美訳　五九七四円
政治経済通信・他―社会主義経済研究所機関紙―
〈戦後社会運動資料／新聞・雑誌編〉
法政大学大原社会問題研究所編　三九一四〇円
特別定価三六〇五〇円／特価締切＝12月末日迄
モルディブの謎　T・ヘイエルダール／木村伸義訳　四四二九円
近代哲学の精神　H・ハイムゼート／座小田豊・後藤嘉也・他訳　四九四四円
ギボン―歴史を創る―　R・ポーター／中野好之・海保真夫・松原慶子訳　二九八七円
欺瞞の書　シオラン／金井　裕訳　二八八四円
カフカとカバラ　K・E・グレーツィンガー／清水健次訳　三九一四円
ベアトリーチェの身体（からだ）　R・P・ハリスン／船倉正憲訳　三〇九〇円
マルティン・ハイデガー　H・エーベリング／青木隆嘉訳　二八八四円
地獄のマキアヴェッリ（I）　S・de・グラツィア／田中治男訳　三五〇二円
地獄の歴史　A・K・ターナー／野崎嘉信訳　四四二九円
現代哲学の主潮流　5　W・シュテークミュラー／中埜肇・竹尾治一郎監修　七五一九円
哲学〈46号〉　日本哲学会編　一七五一円
ウィトゲンシュタイン読本　飯田　隆　編　三〇九〇円
昔話と伝説―物語文学の二つの基本形式―　M・リューティ／高木昌史・高木万里子訳　三七〇八円
手紙の時代　髙橋　安光　三〇九〇円

■放送大学教育振興会（○印はビデオ・ソフト）
〔教師用ビデオ教材＝いずれも放送教育開発センター編　定価各一四、〇〇〇円〕
○「新教育課程の授業―中学校・数学」（56分）
○「新教育課程の授業―中学校・理科」（52分）
○「新教育課程の授業―中学校・英語」（54分）
○「新教育課程の授業―中学校・環境教育」（30分）

■明星大学出版部
教育行政の原理・組織　改定増補　小山　俊也　三二九六円
日本の近代美術入門 1800～1990　井関　正昭　三九一四円

■早稲田大学出版部
私の大学論　奥島　孝康　二九〇〇円
イギリスの行政　下條美智彦　二八〇〇円
比較経済発展論―日本とオーストラリア―　大塚　勝夫　三〇〇〇円
ヨーロッパの神と祭―光と闇の習俗―　植田　重雄　五五〇〇円

シリーズ　社会経済史
4　社会保障への道―一八三四―一九一四年イギリス―
M・ローズ、武居良明訳　一七〇〇円
早稲田大学理工総研シリーズ
3　建築の光熱水原単位〔東京版〕　尾島俊雄研究室　二〇〇〇円
4　沙漠緑化への途―文明の転換―　村井資長編著　二〇〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　国書篇第三期
第41巻　享保宝暦俳諧集　雲英末雄編　一八〇〇〇円

■名古屋大学出版会
日韓交流の民族考古学　渡辺　誠　六九〇一円
柳田國男　経世済民の学―経済・倫理・教育―　藤井　隆至　六六九五円
経済認識の歩み―国家と経済システム―
Ph・ディーン／中矢・家本・山田・橋本訳　三二九六円
昆虫の生化学・分子生物学　大西英爾・高橋進・園部治之編　四九四四円

■京都大学学術出版会
科学と大学の将来―日米大学長は語る　江崎玲於奈・尾上久雄監修　二五〇〇円
Stable Isotopes in The Biosphere　和田英太郎他編　三〇〇〇円
Structure and Function of Soil Communities　安部琢哉他編　三五〇〇円

■大阪経済法科大学出版部
弁証法論究　立野　保男　五九七四円

■関西大学出版部
生活とバイオ　飴山　實・小幡　斉　一五〇〇円
中国文法学説史　鳥井　克之　七〇〇〇円
居延漢簡索引　大庭　脩編　五〇〇〇円
享保時代の日中関係資料二〈朱氏三兄弟集〉
―近世日中交渉史料集三―　大庭　脩編著　一二〇〇〇円
国際経済と産業組織―寡占と貿易・直接投資・収支調整―　田中　茂和　六〇〇〇円
勧進能并狂言尽番組　関谷　俊彦編　二二〇〇〇円

■九州大学出版会
高齢者生活文化の創造―人生一〇〇年を生きる―　九州家政学総合研究会編　三六〇五円
タイの工業化と社会の変容―日系企業はタイをどう変えたか―
〈アジア太平洋センター研究叢書1〉小川雄平編著　二八八四円
アジア太平洋地域の会計
西村明、R・ウィレット、N・バイドン編／西村監訳四六三五円
明治期紡績技術関係史―日本の工業化問題への接近―　岡本　幸雄　三五〇二円
地球社会の共生を求めて〈九州産業大学公開講座7〉
九州産業大学公開講座委員会編　二〇〇〇円
クレメンテ解剖学マニュアル　北條　暉幸　二八八四円
近代ザクセン国制史　ゲーアハルト・シュミット／松尾展成編訳　四一二〇円
日韓関係の再構築とアジア　金　龍瑞　四一二〇円

■流通経済大学出版会

■大阪大学出版会
新国連論―国際平和のための国連と日本の役割―　神余　隆博　二五〇〇円

●製作の現場から　12

網（インターネット）にかかった人々

▼ハム（アマチュア無線）の試験に落ちたことがある。当時はまだ通信衛星のなかった時代だから、短波の利用価値ははるかに高く、試験も今よりはむずかしかった（ようだ）。とはいえ大学入試とは違って、落とすための試験ではない。入門書の一冊もきちんと読んで臨めば、落ちるはずはないのである。

▼思えばこれが、夢は持つが努力はせずに挫折するという、わが人生の悪しきパターンの始まりであった（この際、「努力したものだけが〈挫折〉という言葉を使うことができる」などと、堅いことは言わないでほしい）。が、そんなことはどうでもいい。気になるのはアマチュア無線家の諸君たちだ。

▼彼らは最近、元気がないように見える。災害時には時折彼らの活躍が新聞に載るものの、ひと昔、いや、ふた昔前ほどのことはない。書店の雑誌コーナーを見ても、明らかにその方面の雑誌は減っている。彼らは、どこへ行ってしまったのだろう。

▼聞くところによれば、彼らは今、続々とインターネットとやらに集結しつつあるらしい。彼らだけではなく、十数年を遡るパソコンの石器時代に、自分でワンボードパソコンを組み立てていたようなオタクたちも、操作のやさしくなった最近のパソコンでは「一般人」との差別化がはかれないと、「むずかしいから意義がある」インターネットの旗を振っているらしい。

▼となれば挫折男としても、多少の興味は惹かれざるをえない。大枚三千円也を払って、電子出版協会主催のインターネット体験セミナーにもぐり込んでみた。出席者は出版社を中心に印刷会社、取次店、電話会社などの関係者約八十名。それほど広い会場ではなかったので、いささか暑苦しいほどだった。

▼紙面の関係上詳細は省くが、第一部では「インターネットへの扉」と題して、インターネットで出来ること、接続に必要なもの、接続にかかる費用、ビジネス利用の実際、などについて説明があり、引き続く第二部では、実際にパソコンを操作してデモンストレーションが行なわれた。

▼主催者には申し訳ないが、正直なところ第一部はあまりにも通り一遍の説明であった。第二部では、グラフィック表示の遅さばかりが気になった。光ファイバーが張りめぐらされる時代になればともかく、当面はタイトル画面にグラフィックなど使わない方がいいのにと思って、このセミナーを紹介してくれたU氏に同意を求めると、氏曰ハク、「パソ通（パソコン通信）やってた連中はネ、文字ばっかりの世界だったから、絵がでてくるとそれだけで嬉しいんだヨ」ということであった。――とりあえず納得。

▼某夕刊紙に「インターネット・カフェ」なるものの記事が載っていた。店内の映像をインターネットに乗せ、ホームページにアクセスすると、この店の割引券が貰えるのだそうな。なんとも下らない、と思う。同時に、「それでイイのだ」とも思う。インターネットは、デジタル信号を言語とする一つの世界であり、世界にはなにがあってもおかしくはないからだ。犯罪と戦争を除いて、世界は「なんでもあり」のほうが楽しい。

▼だから、「インターネットとはなにか」という問いは、「世界とはなにか」という問いにも似て、抽象的にならざるをえない。「テレビとはなにか」という問いとは全く性質が異なる。したがって必要なのは、一方ではアクセスするための、徹底的に技術的な解説であり、一方ではたとえば「学術書編集者のためのインターネット」、「製作の現場におけるインターネットの利用法」といった、限定された対象のための具体的なセミナーではないかと思う。書籍出版協会あたりで検討してはもらえないだろうか。

（かすみ網）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北９条西８丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎１－１ TEL. 048-725-0324 FAX 048-725-0324
慶應通信	〒108 東京都港区三田２－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘２－16－５ 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
専修大学出版局	〒101 東京都千代田区神田神保町3－8－3 専修大学別館 TEL. 03-3263-4238 FAX 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園６－１－１ TEL. 0427-39-8935 FAX 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－１ TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷２－28－４ TEL.03-5478-0891 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷７－３－１ 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町２－２ TEL. 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘１－１－１ TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒162 東京都新宿区市谷田町２－14－１ TEL. 03-5228-6271 FAX 03-5228-6010
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門１－14－１ 郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保２－１－１ TEL. 0425-91-9979 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町１－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町１ 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺６－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町３－３－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎７－１－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172
流通経済大学出版会(準会員)	〒301 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011
大阪大学出版会(準会員)	〒565 大阪府吹田市山田丘１－１ 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614 FAX 06-877-1614

大学出版(第27号) '95秋 平成７年９月30日発行 発行所 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番１号 東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円 〒共